



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第40号

久元祐子メモリアルリサイタル in 「ブルーホール」

モーツァルトへの手紙 (その16)

会員番号 K.618 加藤 明



○ 我が掛替えなきモーツァルトよ！《道の駅五城目》に赴任して半年が経過しました。

秋の実りの収穫期を終えた昨今、森の紅葉の美しさには眼を見張るものがあります。

さて、この間「きっとそうだろうなあ」といった想定内の現象が殆どでしたが、偶には「ええっ！」と驚きと感動に撃たれるような出来事も少なからずありました。

その驚きと感動の一コマをあなたにご報告したいと思います。

小生の父はかつて当道の駅に程近い集落で開業医として働いておりました。稼働期間は昭和43年に50歳で他界するまでの9年間でした。父は己の短命を予期していたかのように、その死の3年ほど前に【足跡】というタイトルの自叙伝を自費出版していました。そこには、小作農家の次男に生まれ、二十歳で秋田の第17連隊に入隊後、衛生兵として満州に渡り、現地で医師の免許を取得しつつも、終戦に遇ったこと。そし

て終戦直後の過酷な引き上げを乗り越えて内地に帰還。県内各地の勤務医を経てようやく故郷の五城目で開業を果たした、というストーリーが立志伝風に書かれていました。この【足跡】を父は300冊ほど印刷し、知り合いの方々に自慢気に配っていたように記憶しています。

8月下旬、突然その【足跡】を直接父から譲り受けられた、という方からお電話を頂き、「ええっ！」と大変驚いたわけです。数日後、その電話の主であるI氏が道の駅に来られました。初対面なのですが、何か旧知の間柄のような不思議な感覚を懐きました。I氏は長く教職につかれ、五城目町の教育界でも活躍された方でした。お会いしてすぐにI氏は父から贈られたという【足跡】を目の前に差し出しました。

表紙には「I・K様 何か貴兄の心の糧にでもなれば幸いです」と署名入りで書かれており、それは紛れもなく父の筆跡でし

た。I氏によると、I氏の大学受験の一週間ほど前に急に腹痛をおこし、父から診察を受けた際に不意に贈呈された、というお話でした。「この本をもっと早い時期に読んでいたら、私の人生は大きく変わっていたでしょう・・・」。こんな風にI氏は半世紀前の「不本意な大学受験」について告白されていましたが、それを小生は一流の奥深い謙遜と受けとめました。

半世紀を経て小生が五城目の道の駅に赴任するという奇縁が、鬼籍に入って半世紀の父をこうして甦らせるという「驚くべき物語」を創作したように思われました。

存命中は近寄り難い父でしたが、一時間ほど懐かしいお話をされ、どことなく晴々としたI氏を見送ったあと、「親父も善く生きようとしていたんだなあ・・・」と、何かしら込み上げるものを禁じ得ませんでした。

そんな驚きと感動の小話ですが、あの時明るい陽射しの道の駅のエントランスにはあなたのあのふくよかなクラリネット五重奏が包み込むように流れていました。



「モーツァルト広場」は今年のモーツァルトの命日で発足24年目を数えます。

アトリオンホールでの2度の記念コンサートを含め、「サマーコンサート」は今年で22回目となりました。

モーツァルトの命日を記念して開かれる12月の「アニバーサリーパーティー」と7月の「サマーコンサート」を合わせると実に50回ほどの愛好の集いを開催して来たこととなります。

「広場」の運営は総勢13名で成る幹事会での決議に基づいて行われますが、幹事会はここ数年毎月一回の頻度で開き、多岐にわたる音楽談義や世間話などに花を咲かせては愉しくやっているところです。

そんな中、確か7月の幹事会で幹事の一人、ピアノ調律のプロフェッショナルのKさんから「10月に潟上市のブルーホールで久元祐子さんがリサイタルを開くようだ」との情報がもたらされました。

聞くとところによると、フォトギャラリーブルーホールを運営する「中村征夫オフィス」が地元潟上市の協賛を得て、施設のオーナーである「小玉醸造」の協力のもと開催する運びとなったようだ、とのお話でした。

ブルーホールはピアノを常設していないため、ピアノのエキスパートであるKさんに施設のオーナー側からご相談があった由。

結構難儀な仕事を引き受けることになったKさんですが、久元祐子さんと言えば、「モーツァルト広場」の育ての親であり、たった一人の名誉会員でもありますから、当然幹事会としても出来る限りのバックアップをすることにしました。

その後、リサイタルの本番が10月13日土曜日と決まり、小生は二年ぶりに久元女史とお会いできること、そして女史によるブルーホール初

のピアノの演奏に想いを馳せて、胸を躍らせた。
した。

8月に入り、小玉醸造のK女史から小生に連絡が入り、「広場」に後援をお願いしたい、とのご依頼でしたので、二つ返事でお引き受けしました。



K女史から頂いたチラシには【ブルーホール開館9周年記念】という冠の下に【久元祐子ピアノリサイタル】とあり、副題として『名曲による花束 ピアノで奏でるロマンの世界』という文字。その清楚なデザインがとても魅力的でした。

早速、後援の名に恥じないよう会員各位にお声をかけることになりました。

K女史から預かったチケットが思うようにはかどらないでいたある日、灯台下暗らし、小生の小学4年の孫のSがピアノを習っていることに気づきました。

そこで、Sの母である嫁さんにファミリー分の三枚を手渡し、「とにかく好い機会だから是非Sちゃんに聴かせたらどうか・・・」と高飛車に勧誘したわけです。

そしたら、嫁さんも時折ピアノを弾いている関係からか、Sも興味を示して「聴きたい」、とのことでホッと胸をなでおろしました。

13日午後3時開演のリサイタル当日、少し早めに来るように嫁さんに伝えてはいましたが、何と嫁さんとS、そしてSの友達Mちゃんの三人組が会場に現れたのは2時受付開始の30分ほど前だったのでビックリ。



こうなったら、できるだけステージに近いところに座らせたいと企む好々爺たる小生は、受付と同時に三人が最前列に座れるよう案内役を買って出ました。



一列8席の最前列に遠慮がちに座った三人は目の前のステージ上のグランドピアノの見晴らしの良さに緊張を隠せない様子でした（当日は200席を超える席が満席状態）。

ステージ上で中村征夫氏とのオープニングの掛け合いの後、いよいよ久元祐子さんのピアノリサイタルが始まりました。

開口一番、最前列の小学生と思しき二人の女の子を目の前に、「可愛いお子さんがいらして、とても嬉しい・・・」といった歓迎のトークがあり、会場が一瞬にしてなごやかな雰囲気包ま

れました。

最前列に座れるようにした小生は、改めて久元女史の繊細な気づかいと会場の一体感を醸成する巧みな話術に感動してしまいました。

SもMちゃんもその歓迎のトークをはにかみながら受けとめていたようです。

リサイタルの構成の巧みさと曲の合間での久元女史のジョークを交えたスピーチに会場は盛り上がり、小生はいつしか時間を忘れてのめりこんでいました。

そう、正に全編副題の「名曲の花束」を地で行くステージ。

ロマン派の名曲をホールに詰めかけた皆に花束を手渡すような優しさと悦びに溢れた、女史ならではの知的エンターテイメントを感じさせるステージでした。

ピアノ初体験という「ブルーホール」は元々酒蔵だったというだけあって天井も高く、ピアノが遠くまで響きわたる素敵なホールの構造に成っていました。

久元祐子さんはいつも構えず気取らず自然体で場の空気を察知しながら、なにより音楽の愉しさを醸し出しながら、視聴者と共有できるステージを大切にしてきた真の知性派だと再認識しました。

そして、演奏者と視聴者相互の呼吸を大切に
する姿勢が“一流の証”ではないか、とつくづく実感させられたものでした。

圧巻のアンコールは小玉醸造の酒蔵のステージを印象づけるシュトラウス二世のワルツ「酒・女・歌」をテンポよく弾かれ、音楽の愉

悦を皆で分かち合うような一体感を醸成（！）し、ホール全体が大いに沸いたものでした。

ブルーホール開館9周年のメモリアルに相応しく、場内が歓喜うちにリサイタルが終演しましたが、小生にとって初めて孫のSとコンサートを楽しんだ、という意味でも忘れがたいメモリアルになったわけです。

終演後多くの笑顔を見送る中に、嫁さんと一緒に出口に向かうSとMちゃんを見つけて「どうだった・・・？」と尋ねたら、SとMちゃんは何やら興奮冷めやらぬ面持ちで、異口同音「・・・楽しかった・・・」とポツリポツリ。

小生は、「わかったつもりでベラベラお喋りしなくて良かった」、と内心ホッとしました。

人は真に感動した後は口が回らないものだからです。でも、二人の何とも言えない愛らしい笑顔がすべてを物語っていました。

きっと、この日のブルーホールでのピアノリサイタルを彼女らは一生の思い出にしながら生きてゆくだらうなあ、と期待交じりに思いました。

そして、だとしたら、爺さんとしてこんな嬉しいことはない、とその場で立ちつくしながら、何か心の底からジーンと来るものを禁じ得ませんでした。

帰路に就く間際、ピアノ調律でこの人でなければ出来ない素晴らしい仕事をされたKさん、彼の達成感に満ちた和やかな笑顔がこのピアノリサイタルの想像を超えた成功を象徴していたように思われました。 end

「プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード」(映画・DVD) を観て

会員番号 K.203 松田至弘

モーツァルト本人を主人公にした映画が、生誕260年に当たる2016年に製作された。

(英・チェコ合作)

わが国では2017年の冬、ヒューマントラストシネマ有楽町や全国各地の映画館で一般公開された。ジョン・スティーブソン監督の「プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード」(原題・Interlude in Prague. 103分) がそれである。

映画の公開は予想に反してあまり話題にならず、モーツァルトファンでも知らない人が多かったように思われる。しかし、映画はまもなく、DVD化され市販されてレンタルビデオ店にも置かれるようになった。今では、いつでも借りて観ることができる。



「プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード」のDVD

モーツァルト本人を主人公にした映画といえば、すぐミロス・フォアマン監督の「アマデウス」が思い出される。この映画が製作されたのが1984年であるから、以後30数年に渡ってモー

ツァルトを主人公とした映画は作られなかったことになる。

2010年に、フランスのルネ・フェレ監督のモーツァルト映画―「ナンネル・モーツァルト 哀しみの旅路」が製作されているのではないかと指摘される方がいると思うが、これはモーツァルトの実姉マリア・アンナを主人公にした映画である。

ヨーロッパの歴史と文化を研究する者として、また、一人の映画ファンとして、この作品を楽しみながら冷静に観てみることにしたい。

*

「プラハのモーツァルト 誘惑のマスカレード」は、作曲家モーツァルトの1787年のプラハ訪問という史実に想を得て製作されているので、次に史実と映画のストーリーとを比較してみよう。

[1787年のプラハ訪問の史実]

ハプスブルク家支配下のプラハで、オペラ「フィガロの結婚」が上演され大成功を収めると、作曲をしたモーツァルトは、プラハの音楽家や音楽愛好家たちからこのボヘミアの都市へ招待された。

モーツァルトは、妻のコンスタンツェと義兄のホーファーを連れて1787年1月8日にウィーンを出発、11日にプラハに到着して2月8日ごろまで滞在した。

この間、プラハの名士や芸術家たちを訪ね、社交界の催しや祝祭行事に顔を出し、フリーメイソンの人々とも交わった。

1月17日の「フィガロの結婚」の上演会に妻と共に列席し、その後行われたノスティッツ劇

場（現・スタヴォフスケ劇場）でのモーツァルトの音楽会で、「交響曲第38番ニ長調」（通称プラハ）を初演した。

モーツァルトはどこでも大歓迎され、劇場監督のボンディーニから新作オペラの作曲依頼を受けてウィーンに帰った。

契約したオペラ上演のために、モーツァルトは同年10月4日、再び妻コンスタンツェを伴ってプラハを訪れた。

オペラの題名は、ロレンツォ・ダ・ポンテ台本の「ドン・ジョヴァンニ」で、作曲はまだ完成していなかった。

モーツァルトは、友人の音楽家ドゥーシェク夫妻の別荘ベルトラムカ（現・W. A. モーツァルト・ドゥーシェク夫妻記念館）に滞在してオペラの仕上げに取り組んだ。



モーツァルトが滞在したベルトラムカ荘（現・記念館）

10月29日に、ノスティッツ劇場でやっと「ドン・ジョヴァンニ」の初演が行われ、モーツァルトは自ら指揮して大成功を収めた。

モーツァルトは、お世話になったドゥーシェク夫人のために、劇唱（シェーナ）のレチタティーヴォとアリア「私の美しい恋人よ、さようなら／とどまってください、ああ愛しい人よ」を作曲して捧げ、11月16日ごろウィーンに

帰った。

*

〔映画のストーリー〕

1786年、プラハのノスティッツ劇場で、オペラ「フィガロの結婚」が上演され喝采を浴びた。

劇場のパトロンであった名門貴族のサロカ男爵（ジェームス・ピュアフォイ）の屋敷で宴会が開かれると、作曲家モーツァルトと「フィガロ」の話でもちきりになり、プラハに招待したらどうかということになった。出席者それぞれが寄付を出し合い、足りない分を男爵が負担するということがまとまった。

そんな折、「フィガロの結婚」のケルビーノ役の歌手が不在になるという出来事が起こり、サロカ男爵はヨゼフィーネ・ドゥーシェク夫人（サマンサ・バークス）の推薦で、美しい新進歌手スザンナ・ルプタック（モーフィッド・クラーク）を代役に指名した。

男爵は、女性に手が早く悪い評判のたえない猟色家で、スザンナを自分のものにしようと狙っていたのである。

一方、プラハからの招待を受けたモーツァルト（アナイリン・バーナード）は、ウィーンから馬車でやってきてドゥーシェク夫妻の別荘ベルトラムカに滞在した。そして夫人に、息子ヨハンを病で失った悲しみや傷心の妻コンスタンツェが温泉治療に出掛けていることなどを話し、新作オペラ「ドン・ジョヴァンニ」の作曲に一生懸命取り組んだ。

そんなモーツァルトであったが、仮面舞踏会に招待されると「フィガロの結婚」の演奏に合わせて華麗に踊り、会場でバラの仮面をつけたスザンナに話しかけられ強くひきつけられる。そして二人は、その後の歌のレッスンやリハーサルを通して急速に仲を深めた。

サロカ男爵は、二人の関係を疑い激しく嫉妬

し、ザルツブルク大司教から派遣された特使ヘンリー・ノフィ（エドモンド・キングスレイ）を利用して密通の確かな証拠をつかもうとする。そして、スザンナの父ルプタック（エイドリアン・エドモンソン）に娘との結婚を申し入れ承諾させる。

スザンナから婚約したという話を聞くとモーツァルトは、ルプタック家を訪ねて父に婚約を破棄するよう進言するが、男爵の家柄にひかれていた父は強く拒否した。

スザンナはサロカ男爵と結婚する前に、モーツァルトと一夜を共にする決心をかため、両親が旅に出た留守中に自宅に招き入れて思いを遂げる。

だが、密通の証拠をつかめず怒り狂ったサロカ男爵は、モーツァルト指揮の「フィガロの結婚」の観劇の後、いやがるスザンナを自分の屋敷に無理やり連れ込み、強姦して死なせてしまうのである。男爵はこれを事故死と主張した。

悲しみにくれるモーツァルトを訪れたルプタック氏は、自分の間違いを認めて謝り、モーツァルトも自分のした行為について詫言った。そんな時、手紙で呼び寄せていた妻コンスタンツェが、息子を連れてベルトラムカ荘に到着した。

葬儀の日、棺につきそい墓地を歩くモーツァルトの脳裏に、サロカ男爵と新作オペラの主人公ドン・ジョヴァンニが重なって浮かび上がり、復讐を受けてドン・ジョヴァンニが地獄へ落とされるイメージが鮮明になった。

オペラ「ドン・ジョヴァンニ」の公演の日は迫っていた。モーツァルトは眠い眼をこすって、最後に残された序曲の作曲に取り組み、コンスタンツェはその写譜を急がせた。

「ドン・ジョヴァンニ」は、こうして序曲についてのリハーサルなしで、モーツァルト本人が指揮して初演された。指揮棒を振りながら、

ドンナ・エルヴィーラが悲しく歌うアリアを聴き、それにスザンナの顔が重なって見ると、モーツァルトの目に涙が光り頬を伝わった。



「ドン・ジョヴァンニ」が初演されたプラハの劇場（現・スタヴォフスケ劇場）

*

いささか詳しく述べすぎたが、この映画は、モーツァルトが1787年にオペラ「フィガロの結婚」で熱狂するプラハを訪れ、新作オペラ「ドン・ジョヴァンニ」を完成させて自ら指揮し初演した、という史実をもとに考えられた一つのフィクションである。

核心となっているのは、モーツァルトと新進歌手スザンナ・ルプタックとの恋であり、それにスザンナを愛人にしようと企む名門貴族のサロカ男爵の嫉妬と陰謀を絡ませている。ミステリアスでエンターテインメント性の高い物語になっている。

しかも、面白いことに、新進歌手の名前スザンナは、「フィガロの結婚」のアルマヴィーヴァ伯爵夫人の侍女スザンナから転用しており、また、サロカ男爵はオペラ「ドン・ジョヴァンニ」で放蕩の限りを尽くす主人公そのものを想起させ、モーツァルトの劇的想像力と作曲能力

を刺激する人物として位置づけられている。

物語がモーツァルトとそのオペラについての一つの新しい詩だとしても、この映画には「事実はこちらではないだろうか」と思わせるリアリティーに富む描写がたくさん見られる。

かつて私たちは、大作「アマデウス」を観て、「自由でとてつもなく天衣無縫なモーツァルト」のイメージを心のなかに印象づけられたが、この映画でイギリスの俳優アナイリン・バーナードが演じたのは、優しい雰囲気を持ち社交好き、そして情熱的で繊細、作曲に苦勞するモーツァルトである。ハンサムなモーツァルトのため違和感を覚えないでもないが、性格像の一面は、よく描写されているように思う。

ところで、この映画はオペラ「フィガロの結婚」で、ドゥーシェク夫人が伯爵夫人のアリアを歌う場面から始まる。そして、夫人は映画全体を通して登場する。

当時のプラハでは、ドゥーシェク夫人は美しく魅惑的な女性・歌唱芸術の第一人者（ソプラノ歌手）として人気があった。夫のフランツ・ドゥーシェクも信望の厚い音楽家・教育者で、夫婦揃って芸術家としての名声を獲得していた。ドゥーシェク家の別荘ベルトラムカには、芸術家や音楽の愛好家、貴族、学者など上流社会に属する名士が大勢集まった。

そのドゥーシェク夫人役を、イギリスの歌手で女優のサマンサ・バークスが演じている。自らの声（吹き替えなし）で美しく魅力的に歌い、モーツァルトとの真の友情を大切にする快活で屈託のないドゥーシェク夫人をみごとに表現している。

これまで、ドゥーシェク夫人の人となり歌手活動について、具体的なイメージを持ってないでいたが、おそらくこうだったのであろうと思われるのではない。

*

この映画の撮影は、チェコの首都プラハと南ボヘミア州の小さな町チェスキー・クルムロフで行われた。どちらも歴史的な景観と貴重な文化遺産を持つ美しい町である。

特に、モーツァルトが実際に訪れたプラハは、「百塔の町」や「ヨーロッパの音楽院」などと称賛されており、歴史的な建物や中世の街並みを色濃く残している。映画の舞台として最適と断言していいであろう。

モーツァルトが滞在したベルトラムカ荘は、1956年から「W. A. モーツァルト・ドゥーシェク夫妻記念館」になり運営されているが、映画撮影当時には修復工事が行われていた。そのため撮影には、プラハの別の建物が使用されている。

また、オペラを上演するノスティッツ劇場は、外観はそのままであるが、内部の撮影にはチェスキー・クルムロフの宮殿劇場が使用された。



チェスキー・クルムロフのバロック風の宮殿劇場

この劇場の創設は17世紀と言われ、世界でも稀なすばらしいバロック風の劇場である。映画では、この劇場の舞台や観客席はもちろん、舞台裏の技術的装置まで効果的に映し出している。

オペラの上演やさまざまな音楽シーンを担当したのは、有名なプラハ市立フィルハーモニー管弦楽団であった。映画は、見応えのある音楽ドラマになっている。

新参者ですが宜しく

会員番号 K.525 上神谷 郁 夫

こんにちは。はじめまして2018年7月に新たに会員になりました上神谷郁夫といます。かみがみやと読みまして珍しい名字とよく言われます。

この名字については調べたことはありませんが、秋田県内に数軒あと大阪と茨城にも住んでいる方がいらっしゃるようです。名乗ったときにインパクトがあるので営業の仕事など、お客様に覚えてもらいやすいといったメリットがあります。

でも仕事は営業職ではなくフードサービス関係の職業など40余年携わってまいりました。最初に就職した会社の上司が当広場代表の加藤明さんでさまざまなことで大変お世話になりました。社会に出たばかりで右も左も分からない自分を公私共に、指導助言して頂いたお陰で今の自分があると感謝しております。ここ20年は病院福祉施設関係の給食委託会社に在籍しております。

さて私と音楽の出合なのですが、中学生の頃

父親がたまたまテレビ番組で放送された、チャイコフスキーの悲愴交響曲を録音したテープがありまして、何となく聴いていたところある時霧が晴れて目の前に新しい世界が広がるような衝撃を受けました。なんなんだこれは。その後同じクラスにやはり音楽好きの人がおりまして、互いに交流し音楽体験の幅を広げることができました。以来40数年間に480枚余りのレコードCDを買い集めました。時代、地域、曲のジャンルにとらわれず、幅広く自由に音楽を楽しみたいと思っております。

ただ最近感じることは、生演奏というのはレコードCDに比べて情報量が桁違いに多いということです。さて当会につきましても、以前からわかっておりましたが、日常の忙しさにかまけてそのままにしておりました。しかしサマーコンサートに行った折に代表に勧められて入会しました。

というわけで、色々な意味で未熟者ではありますが、以後よろしくお願ひしたいと思ひます。

酒とモツの日々 (40)

会員番号 K.488 佐 藤 滋

今年のサマーコンサートは猛暑の7月25日に行われました。繊細かつ雄弁なピアノソロ、フレージングの表情豊かなヴァイオリンソナタ、あたかも赤子が無垢で無防備な存在に怯えるような短調の影を温かく照らす弦楽四重奏（この年、モーツァルトは父親になった）……等。どれも心に残る素晴らしい演奏でした。でも一番素敵だったのは、暑い会場を埋めた満員の聴衆の熱心な鑑賞と力強い拍手でした。スタッフとして思ったのは「こんな人たちが才能

を育てる」という感覚でした。

私がモーツァルトを聴き始めて半世紀のあいだ、演奏の世界は随分変わりました。交響曲でいえば独裁的長老指揮者による重厚な演奏から、古楽器によるアンサンブル重視の表現、そして近年はオーケストラとのコミュニケーションを大切に作る才能豊かな若手指揮者による個性豊かな演奏……でもそれ以上に伝記、研究の分野で大きな変革がありました。若い頃に読んだメリメ、バルト、アインシュタインらによる賞賛、

啓蒙的文章。「素晴らしい天才、神童、悲劇の音楽家、神に選ばれし純粋な人格……。」

それが70年代以降、ヒルデスハイマーや映画「アマデウス」によって従来の賛辞に疑問符が付けられ、近年は小宮正安、岡田暁生ら若手研究者によって周辺の人々への評価も書き換えられています。

例えば悪妻コンスタンツェ、非情な大司教コロレド、守銭奴のシカネーダー、殺人犯扱いにされた弟子ジュスマイヤー。その他、友人、支援者、息子たちにまで被せられた「無能」という冠詞。乏しい一次資料だけでなく、二次・三次資料を駆使して当時の風習・習慣・伝統や天候等の科学資料を紐解きながら実像はどうだったのか、200年を経てようやく「客観」という視点でモーツァルトが捉え直されようとしています。

これはとても大切なことで、もしも我々の周辺にモーツァルト級の大天才（音楽に限らず）がいて、それを認めなければ、今後200年は無能な隣人として後世扱われる可能性があるのです。そんな天才はいない？いえいえバッハもモーツァルトも評価されたのは死後しばらくしてのことです。われわれも油断はできません。

われわれ秋田県人は「ひやみこぎ」と批判されます。要は「俺もしねがら、おめもすな」（人の努力を笑う怠け者）という人の足を引っ張る体質。東北で、秋田ほど著名な政治家、文化人が少ない県はありません。とにかく陰口によって多くの才能が萎み、県外へ逃れていったのではないかと危惧しています。自分に才能が無いことはまあ仕方ないこととして、これからの私たちにできることは努力する人、才能ある人を認め、その成果に惜しみない拍手と祝福を贈ることでしょう。サマーコンサートのお客様は、これからの秋田にとってかけがえのない人々でした。時代を創るのは才能ある人ですが、その才能を育むのは心の大きな隣人なのです。

ところで、陰口がいけないのは「しらふ」の場合のみ。飲んだときは心の中の鬱憤を解放しましょう。飲酒中の戯れ言はその場で聴き止めにする。それが酒飲みのマナーです。秋田県人の酒癖の悪さも、この機会に刷新しましょう。さて私は今飲酒中……。 「俺もピアノにはウルサイんだが、サマコンのピアニスト凄くね？あの音聴いたか？まじやべえ。はんばね！ありえねえ!!」（酔談につき口外無用）

事務局より

今年ほど秋田県が全国にクローズアップされた年はなかったのではないかなと思う年末、特に金足農業高校野球部の甲子園決勝戦進出は記憶にいつまでも残りそうですね。流行語大賞にも選出されるのかな？秋田犬もまだまだ人気が続いています。これに続くのは何か？

サッカーのブラウブリッツ秋田でしょうか、バスケットのハピネッツか。音楽界からも秋田を全国に押し上げてくれるものが出てくることを期待しつつ新しい年を迎えたいですね。寒い季節ですので皆様もお体に気を付けてお過ごしください。（K575）

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H30年12月現在90名）

モーツァルト広場

検索

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田（事務局）080(1673)8322